碧田川梅柳新書 二

へ13
3097
2

へ 3097 2
昭和九年 二四日 購求

# 墨田川梅柳新書巻之二

東都 曲亭主人著

## 三 光政避雨〳〵赤縄ふ繫ぐ

吉田少将惟房の館ふい特づ〳〵松稚梅稚出生〳〵の巧班女前亦賢良するか。春雨老女義ふ仗〳〵これふ傳ゑ。粟津山田以下宗徒の家隷。君ふ仕く私ふ〳〵。當家の繁昌このうへもなくして。上下安堵のおもひをすれども。虚山月雲の仲圓阿闍梨ハ。惟房の親族ゆ〳〵しいはしうば。常ふ消息さく。その安否を問せうとふかる日山田三郎光政〳〵のりて。彼寺ふ詣りうり。この序でとて光政ハ。辛崎明神ふ詣て立〳〵るふ。赤塚といふ処ぐ〳〵来ゐる比及ぶ。雲のよどとまれ。山際いと闇ありつ。時雨のさと降ありて。八の好景忽地ふ淺〳〵風又いと〳〵吹のれ〳〵。琵琶の浪音名ふも似ざれど。雨衣さへ〳〵せざれが辛〳〵て

道の次なる。酒店の簷下に避雨し。霽るを待てうくる。この酒店のあるじ
が名を軍介と呼びて。こころざま勇く膂力人に勝れたり。拳法相撲と嘗て。義
に仗て財をも惜まず。頗志氣ある壮夫なり。妻と浮草と呼ぶ近曾娶りぬ。又
妹に鳥崎といふ處女ありて。こころばせうるはしく。美い舊都の花なりとぞ。
膚い比良の雪よりも清く。年まだ二八とは。笑ひ目元が為に心を焦し。
あるれども妻めとるとはいのおほうの。この日軍介が矢走の私便に。湖水
のうへに浮草。あかしもめとねば。鳥崎い嫂浮草とともに店をもりてあるに。
山田三郎と年紀壮とも。こころばせ美男にして。太刀の飾衣服のいろ
あるとも。もべて女子の目をべき裝ひあるもべ。芙蓉の眸に。度う秋の波よ
りも。憎うど嘗待ちて。おくまりうる坐表に清く。袴の裾ゆりうる。
踏揚の泥もふまずして。操おくに進ずせくん。紐さへむすび緑のとりて。男へ

従者に。ちうせ。女へ嫂に賞守をたぐらう。もしも桃の
ぶるふ。やうも雲散と雨歇に。光政も今にくく立出て。浮草に。庇の
とろこびゆえ。洛のうへゆりの。鳥崎へ今さふ。ふふひ別とうる。
あは降まうとありの雨のやみ晴れと。胸のくつぶ曇り。やくて後山田三郎
へ主の使ととり。敵山に登る毎に軍介が店に憩ひ外ぐる。鳥崎と。見ぬ見
もしつ。こそびふ一さびいと。赫まるのみせもりて。潜に住家ともうせ名とも告て。
ふくまうの相語ら。兄の軍介にかうりのうとも。ある日妻の浮草に味
まとうに。彼も今に年まふ。ありわまど。どうぶ家元来貧しけれべ。嫁とえうもり
も。されべて丈伸る若草の笆とも。超人も結び生涯とめやまうりあり
めじ。こうくまうべきうへ給来させく。都のまぶりも見做せくんに。兄が家
のふに勝べ。このり行こうひりとべ。浮草もと理にとと應ずぞ。

山田三郎
光政辛崎
のかへれさ
軍令ら店ホ
笠やら巳て
鳴崎と契
そめろり

請

情由を学問する人、浩へ彼人のつゝきくゝりの口んうらそ、と抱憂へめれど、他家か
縁ゆゝ結びゝ。夫定めせゝ見てんよりへ、なほ身の幸とおりひうゝ。左も右りとうゆ
引つ。潜ふ山田三郎が来るとまちて、ぶうへと告ちゝせどやとおりへども。結び又その
人もこの廿日めまりへ景ぶんせど。軍分へその日より。後此人ふ浩ゝひて、妹ゞ給まま
をべき由をゝゝ学問する人の儐をゝく。吉田少将惟房の館へまうつゝるふ
縛定ひぶ。鳥崎教びゝゝ限ゝゝく。寔ふ光政どのゝゝ過世ゝりの縁ゆゝ
ふやゆりん。洛ふ中ぶ出方もいと多るふ。彼人の主君ふてあしまち。吉田の
家へまゝり住ゝるゝれゝん。ふひつゝ人ふちゝをべゝもゆゝねど。いとゝくいそぐれ
ゝ。遂ふ北白川の館へまゝひぶ。鷹ゝ斑女前のかゝちゝ召つゝれゝゝ。ちゝれども
衣食足る家ふ礼節ゆりて。男女席とおゝぶゝゝゝるゆゝゝ。ゝゝ
へゝゝぶゆゆゝ。光政と面ゆへゝるゆゝるゆゝ。ぶうへと告遣るべき便もゝく。ふ

山島の峯上と隔ゝつ。夜ゝ明さふ異ゝゝど従ふ西三箇月ゝゝ間ふ行ゝゝゝ
心持ゆゝゝおぼゆゝふひの雲の晴めゝゝゝ月の障ゝ常ゝゝど只昏酸らの紙
嗜ゝひと日ゝゝゝゝ行ふ腹のゆゝゝふくゝゝゝゝ赤塚ふて彼人と偽
初の密事ふ情の種さへ宿せゝゝゝふひゝゝゝ浅ゝゝゝゝ逢ゝゝふ
ゝれど絶てよすゝもゝゝゝゝ。されども山田三郎ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ日辛崎の人さふ軍分ゝ店ふ憩ひ後者ふ昼食ゝゝべさせゝゝゝゝ鳥崎ふ
見へゝゝればゝと本意ゝゝ立ゝりてこの後月林寺ふ到ゝゝふゝゝゝゝゝ
家ふ立ゝりぬゝゝ。絶ふ見へ人ふゆへゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ。鳥の海照る月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
行方と問ゝゝ定ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
斑女前ハ松雅梅雅二人の幼と携て吉田の神社へ詣ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ家隷ふ

木井源五純則。山田三郎光政。この日の俱にうけあうり。春雨老かいさらに鳴崎も五七人の侍婢ありかふ冊はまわらせ。被目深かいと花麗ふ裝ひ。白川の館を立出るふ外わづしき女ばらい。鳥も船と出て茂林かへり。魚も網を漏て荷下ふ拵ふ異あるぞ。彼方此方見うるふたりぞ。鳴崎い山田三郎と目を注ひ送ふこいりふと胸うち騒げども。人目のせをれべつゆぞうも言葉式ひうけぞ。空く帰と別れそう。ゆえに行ふ山田三郎い鳴崎ぐおは館ふ給事もるこ。ゆくとぞわくもうて不審しそ。その夕つかたぞ母ふ近曽當家ふ召されて。君恩又莫大あれども。いまこさ奉公とるさべきるふ鳴崎ぐうう禁ぞて情を運ひそのゆ覆覚ふんふい忽地不忠の人とるべきさん結び果ぬ縁ふあれども。懇ふおりひえとこいで彼ぐ恨て狭とや慰ぐべきぞ。人侍るぐこのはとゆえまるとおひて。只管こうを苦しめるぞふ

又松井源五純則。その仏ざま粟津山田ふい遥ふ劣るぐ。人の妻と猜ぞ己が權ふ誇ぐ。敗と見そい志と移し。色を好ぐ義ふ違ふと見れども。口ふ忠言と吐く君と欺ぞ。その權威却彼二人がとふあり。伴の源五斑女前吉田猪の折しも。黙り侍婢を見るふ。その顔色鳴崎ふおりぶりのあく。寔ふ花中の花ふ。彼亦山田三郎ふおりひを運しそ。多く此方を見えうぞと源五いれふこうありと。惑ひのぐ。そふ往をも安思ぞ。媒とがるぐ。ものぐふその人ふえうむふ。群柏と又童扈従のと怜悧ぞ。許されく後堂へも常ふまるるれべ彼をこそとひく。さもぐふ賺ぐ。汝ぐ為ふこの艶簡をかるる人ふ贈ぐべ。ひふ欲とおりふのと進ぐもべ。ふるぐ。も人あるもぐせのひもと始ひ裸せ。ぐ袂。ぐもそとは出も式。群柏受ぐうて。ぐうと仇ぐと應もめべど走ぐゆ。ふど。源五い世あるもうもうしげあく。既ふ意のるるる心持ぐう。さて群柏い彼艶簡

斑女前
ある日松雅
梅種と
待く
吉田の神社へ
詣のふくの元
山田之郎へ
鳥崎の給車て
めくたろく
驚き怪しむ

と懐に挟て居のうちに到る。忽地にさゝやき。鳩崎は雨夜の品定めし。山田
三郎どのゝ手より来りしと思ひし。源五どのゝ手にはあらずと聞えざる故今明白に
艶簡のぬしを告んとて投入しものなるべし。そもこれは山田どのゝうらと偽り
しぞの回答をも書くるとて深念しつゝ童めかして思ひはつとおとなしび
たりしが。さて群柏は鳩崎が傍に入るゝとまく親く歩み寄りしに山田三郎どの
より進らせたりしと潜かに。源五が艶簡をさし出せり。鳩崎はそのまゝ手に遅しと
うち披きて讀に。思ひの外なる筆のあやにてと不審くりしが巻おさめつゝ
群柏に對ひ。これは汝が偽りにて。山田ぬしより贈りたるものにあるべからず誰より
たのまれしや。明白にその人を聞えあげよと忽地に訴かけて。それ
めしませ何ちん。なほされしを匿のみとて。氣色あらたに問詰るに群柏大に
迷惑し。実はかゝる筋あり。源五がたのみを聞えしよしを述べたりしを

私語べ。鳩崎聞てたゞ尋思し。今面あたりこの艶簡を披露せば。その罪は汝
が身に係りなん痛しさに。これをば火に投て灰ともなすべし。此この志ざしこれ
しきなどひのわたし。いよ〳〵かゝるものを進らする事をうけ引べからずといへば群柏
一議にも及ばず。さて聞えもんぞそのよしをすでに果しぬらんと答へまうすべきを
山田ぬしへ進らせたりし。又源五どのと申さんが。返辞はいかにと問れなば
便宜なくてまゐらせじと答へたまへ。後々こゝろえてよく計て給らん。よくこゝろえ
たまへと諭しつゝ。豫て便ありぬべきおりもあらば写おける一封に。又一筆書そへてこれ
を群柏に遣与したれば。うち點頭て外面へ出ぬ。その夕山田三郎光政は宿直
なく寝まゐらの際をまちがほに。ひとり燈に對て物の本讀居たるに。さるほどに
かけて群柏が手より。鳩崎が消息を得て且驚き且よろこび。封皮切
ひらくこれをよみけるに過にし頃よりこの館にまゐり仕へども。告るに由なく

徒に月日をおくりしが。班女前が吉田の神社に詣のかへるさ。親く見えたりしが。
一言も得かはさゞりしを本意なく別れしなど書つゞけ。さて赤塚なる跪み
妹子の亂を懐胎ありつるが。あはれ此とふなき身になりしに。今は世の月もなりたれば
いつかとかもよべし。このごろの心苦しさはいと察しられよ。さりながら露の玉
の緒絶なんと思ひ定めたるなど。いと哀げに書とどめ。又別に見まほしくは
申べくれば今宵後園の樹の枝に紙を結びさげおき侍るなり。それを葬にて
如此らしの處まで。濡らし其の人ぞ甲夜の間をまちて書きたる光政
は首尾打かへしつゝ讀くだして大に驚きぬ。彼既に有身て。月も重ならんには
縦故郷にてのがるゝにもあれ。密にはらむとも我ものならぬ身ぞその罪いかでか
脱るべき。さらずしもあれ調戯しく。この禍を醸せしこそ越度なれ。さればとて
彼をしてかく苦しめんや。丈夫のこゝろにあらず。さればかくまでも彼処に潜て逢



べやとおもひながら。その夜は障ることありて。終に果さず。鳴崎は光政が合圖の
違ひしを深く恨み。次の日ふたゝび艶簡書したゝめ。彼群柏を相語ひて贈来
れば。山田も懈るにはあらねど。かゝる事ありて黙止せしを。今宵はかならず逢べし
と回書をのこして又群柏に遁与せしが。松井源五厠窺てふかく怪み。竊に彼童を
物陰に招きよせて。縁由を詰問に。かくしおほさずいはざりければ。いたく威されて終に
脱るゝに言葉なく。ぜひなく初めの如此なりと。おちもなく告しらせ。
彼回書をとり出して見せたれば。源五はうち開きて讀もをはらず。忽地
怒氣色面にあらはれ。数回大息吻て居たるが。汝努よしなき謝して。却て
彼等に謀られたり。さあれば汝はわが断腸の仇なり。所詮刺ちがへて死なんの外
なしといひもはてず。刀の鞘を握りしめたれば群柏驚き怕れ。顔色土のごとくに
なりて。只恐れ入て泣たり。源五は其の形容を見て。からくと打笑ひ。

再び声を低しつ。やよ群柏ふくゐ怕さそこつぶ戦さく。なほ童ゐ人な
憎しくいうさせん。ちくめれど。ゆゑ又らのゆゆるを。懲ごるふゐ果
さどく。そのさゐい怨しがし。系引んそ。るけ引ら。心と定めく回答りく
とそ感しつ賺しつこらゆとべ。群柏い命らゐんが恋しさふ。かそるく諾ゐく
しつく。源五へ額どさしせく。ふぐく私語つ。鑢く光政が回書と怪しく巻
こめく返しゆへゆをく内外ふ立列とね。彼源五行のそるさゆれんち。
るの更ふゐうゐれ。

## 四

斑女花ふ寄せく黄金を賜ふ

この時弥生の中旬ふく。園の花色香妙ふ咲ぐん。盛も今二三日ふ過ぐと見
ゆるめうく。少将惟房へ毎日ふ院の御所四辻殿へまらく。家ふ在そるゆを
稀ゐれば斑女前もおのづく籠ぐちゐへのれど。堅ゐんとおりく公のぐさく。夜へ

めしの吹ぬめうへるる前くものを。青ふとなるさんもいく惜しとおぼして。
ひとう端ちくくるち出のゐ折しゆ。さくくと吹入る風ふ時されく賞のゐくるふ
ふくるのゆうう揚くゐをへもるふよくくを巻こめざる艶簡ゆして。山田二郎う
鳥崎への回書ゆうちもおれど潜ゆふ讀果くそれとゐ袖の裏ふゆくしさる
めくぬおりちふく。春雨ふと召づへくゐへ殊さく麗るふ。松稚梅稚と連ねて。
園の花ゐせゐゆとちゐくゆ用意せくと仰るふゐるけゆうう。俄ゐふ
幕を張らせ毛氈布まくくなどる間ふ。斑女へ幼少ゐ二人と携て出させ
ゆへ。盡日拾びくくしさくうう入うゆるへねゆ。てその夜も更ゆくこう。斑女
ゆくう起ゆく燈を掲宿寝しく後方ふ卧くる鳥崎とよびゆくしうう。
近く招さよせゆこの艶簡くくくゆ。せくくこく一封と出させゐへ鳥崎へこう
くうとゐぶゆ。小夜深くふ行るのゐくくまくてゆる事と仰るくく不審

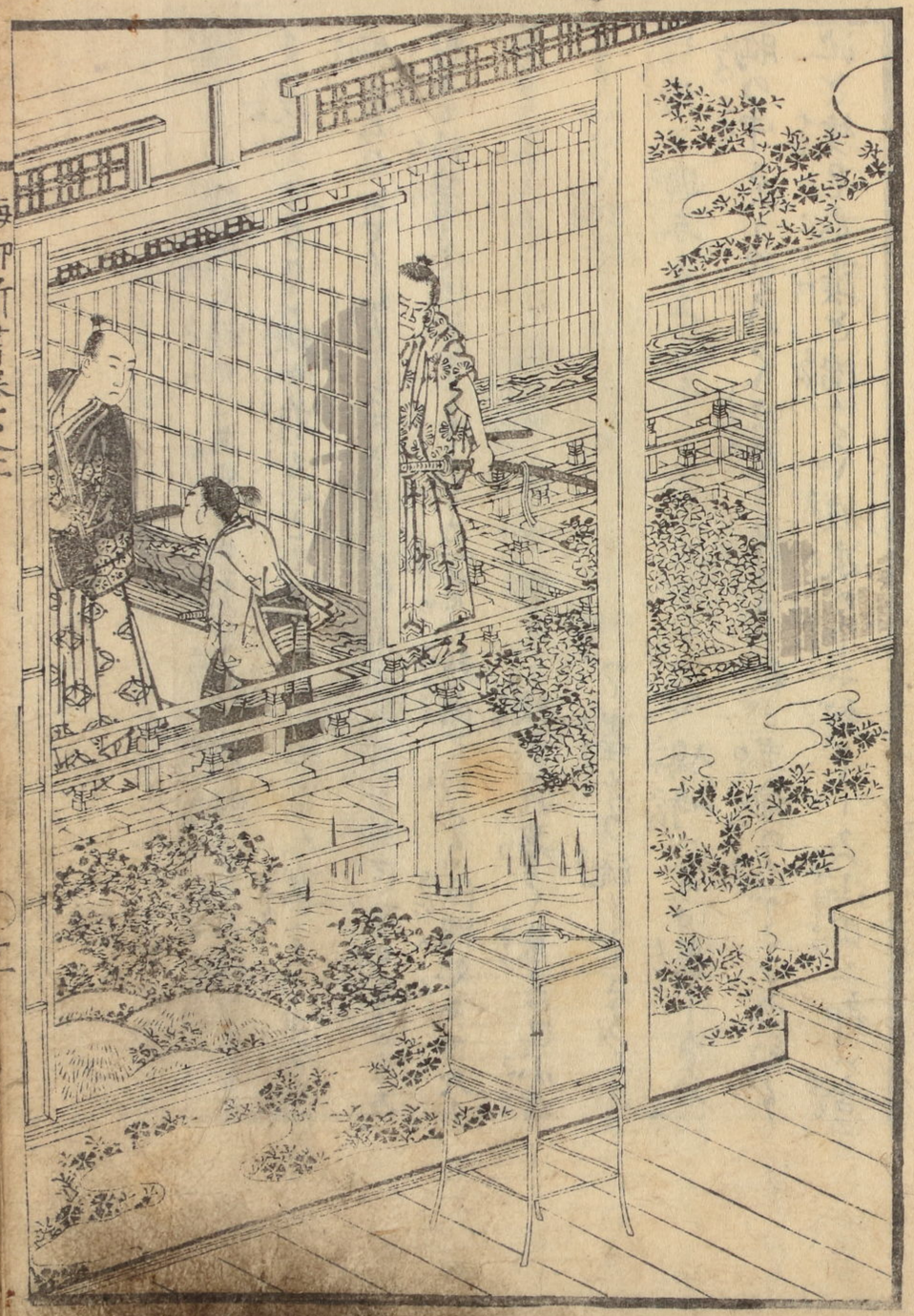
あかりし。手蹟もとかくぞ大に驚き。さハ山田どのより今宵彼処にてあはんとての
回書なるに。心ゆるしてかくこそハ斂めけるとぞふに。只顧胸のみ打さはぐと斑女
ハなほさらぬ風情なり。その艶簡おかえありやと問ひけるにぞ。今ハ匿ともよし
許しのつゞとおのれハいかゞふ心を定め赤塚の避雨より。山田三郎と密會
し。有身まてるをもさらぞ。この館へまゐりし前松井源五が群柏をとりて艶簡
を贈来せしより。彼童を媒としてちぢめなく。筆に言の葉をつくさせしかなど。
或ハなげかしく或ハうしこゝて涙さしぐみつゝ申けり。斑女前つゝぐと笑めひて。
さらしべらの艶簡をバいまだ見ざるに宜ハバ問せのふでくさ只今讀侍るぞ
ちぢめなる。これの進せさんぞとさらめくもてうけるもののあるとかるふに。
斑女前點頭しこれハ人の見せるかハおしぞ。さが才さえつ附。ちかぐの処
おく拾へるなり。おのれに群柏が悶りくとり落せしを。源五が彼童を相語て



汝にも罪せん為に。まうまうりハせらるなるべし。汝ハ新参のものなれバ。縁故ハ
よくもしらねど。彼山田三郎ハ年来わが身を養育なる春雨が一子なれバ。
松稚梅稚が為にハいと後楯なれバよく殿にもいと恩恵高くおはします
を。よからぬ所為をなせしく家の法度を犯をなす。人なかのごとくなんや縦汝が
心へ知らざる前に契りたらば今あらぬその家に仕おくる。おのれ筆にまかせ
述情を運ぶる罪ハいとくすら脱見がし。ましてハなほ。その善悪ハさらに心から
に定むべきにあらず。殿にハ四辻殿にまゐりおはす。いまだ退きあらねバ。今うかうかと
猶もかく聞えまゐらせども。かくも心ろかに任せ侍るべうもあらじ。やよ嶋崎よくよく[?]
ひさせをして弱人の風俗にし。ゐぬその身を過つる世にわれ例にありけん
に迫りて枉死し。身後の恥を曝ものの親兄弟までつくその哀を見せ愚なる
ものの譬にもひかれて。終にその恥辱を雪るの時なし。況君に侍るもの罪を

斑女前山田三郎り鳥崎へ
おくり艶筒をひき初く
彼女子と教諭し夜
深く館を
落し

これより前の日
群柏鳥崎が
使して艶筒を
山田三郎へ
おくり赤ら
こと松井源五
窃窺てふく
猟ミ彼二人
を乗ぜんと
謀れ



まことにこゝろ刃ふ伏をあんじ給へ。汝も行とも云へ光政いよ〳〵辭てもめらるゝんぞ。ふさんぬと宣へば鳥崎いもぐめよう頭とぐふ擡得を情める主の言の葉を顧る程鈍〳〵。只涙のくもり落て袖さへ絞めへざりける。斑女前もいとてとろふわびしん重てそゝるとへ宣へど。俄頃ふ物とろひ出せ〳〵おりちわ。こゞ身りふ園の花を旅ビ歌のいまごろふ稱ぶれば。枝も沼著ざりしふ今ろ〳〵ぞも一首の趣向とろう。汝彼処ふわろく。築墻のやうりゝ。ふりゝる桜の外面へ水垂ま〳〵枝ふれ著く来ま巳。小夜深うれば〳〵〳〵怕ま〳〵。人ゑ驚〳〵そと仰つ。墨もう流〳〵〳〵〳〵と書つけ。その短冊を遍与のゝ元ようごろめらひ。鳥崎いゐは果〳〵ゐ涙いりのうへ。胸の中さへうれ〳〵。立足も定うゐ〳〵ねど主命の已ごさふ。そうう園ふ如て池を繞ま。水蔭を潛う〳〵。彼方の下ふ到ま〳〵ぶ。山田三郎い合圖を違ど。



鬱ようふ竊居ま月のうふとゑかうゐつ水立の間とれ如〳〵なごてかくい遲うしいと待憂うつゝ〳〵潛りそれば鳥崎ぢて走りうしいでもろう袖の雨も音漏さじ〳〵やうぶ池の蛙もちび鳴く。月さへ更ふ臘ゐう光政ん〳〵〳〵その脊を拂おろ。過ゐ〳〵ゐいさのゐより筆ふちもせんば且く措ん身ごろのこゝろれ如おりひさこそと推量う程。ゐ身ふ迫りてこゝくいゐべうものず只一ぶいぞゐ限ゝとも実えゝこそそ〳〵後ぐ〳〵ゐとゐ〳〵ぶく涙とこゝめゐ〳〵泣てん果〳〵ゐとゐふ鳴崎ぢう〳〵ぢく瞼ゝうん拭ひく〳〵ゐべきゐう〳〵ゐぐゐ〳〵ぞ〳〵〳〵そのうひゐ元身とゐりねぞゐ〳〵ゐふゐ身が返事ちゐゐつる玉章と源五ふや謀ら見〳〵ん〳〵ぶふゐもせぬと斑女御前の拾ひゐゐく。夜も深人定く後ゐ〳〵仰ゐあり。〳〵。首ゐう尾まぐ。涙の隙ふ物ぐう彼燈燭とゐう如せば光政ぢ〳〵ゐ毎ふ汗りく胸と刺う〳〵ぐ〳〵。ぐう過ぐゐう

責て理なれ身をとらしむる外なく。あり〳〵ふるとえすぐるおほ不審たい夜中ふその短冊と者よろこ。この樹のもふ迷ひのかたらが濡く居るものとあらん食こそや逢ものかこへ出りの色と畏こて。彼短冊と押戴き。月影ふられとなまべ。

山うぜの咲しわ〳〵ぞへ散る花も又来ふ春ふめいざこうめやハ

と書ながめ光政ちゑ〳〵うち吟じく。忽地ふ潸然と落涙し色ふ耽りて忠も義も立れさる愚者を。憎しとおぼされど花ふめ巳の譬とかく。自害ハこゞめのとおぼ抑野上ふ在せしとえいのりとふ生ちく妹と呼び分と呼れ。母の主君ふ。ちゝでさわれば年来の憂ふハ仕ざるの外今少将の性肉みく仇しめりと人もちる身の幸ハ多へ〳〵こる君と親との恩恵ふ。ふ〳〵忠臣とあらゞとも乱離の人とあり果ゞ。母が実年の誠忠とも徒ものとあんこそ不忠のうへの不孝なるこへ面ふ〳〵已が隨ふ死とるふも死まんざる情ぞ絆ありて。

とく。りのふい勇ハ壮夫も。女しハすぐふ口説べ入鳥崎〳〵悲しびく。宴ふ巳身こゝ〳〵へ過世しりの悪縁ふや一館へ給事ふ。ちるハ後の殃とる。ちゝで漫ふ歎びしハ今ちとちゝべ泣ちるふ。女ごろあ〳〵ゆるも。とてもかても脱身ふ。罪とへちれど有身く。五月めまりとおぼゆれば。ちの子も人の形づくり。又ふや肖ん母ふや崩ん。そもそもちゝど嚴ちよう。くれふ帰そゞいて惜そ今ハ巳め〳〵そへちる。親の心の烏夜と照ゝを笑如の月も西天へ傾く寺〳〵の鐘の音ゆべいと深〳〵。光政猛ふ心づくふ歎〳〵時をうち。斑女御前のいゞ〳〵。わちゝびてや在ちゝんかふせも今霄と限ちゝ潔く立別身。刃の錆と。ある日ふあいわ。そへちもめれ彼処の花ふ。〳〵短冊とえのへ。〳〵〳〵〳〵。見ちそれちゝ〳〵と生る。枝引撓んとちるふ〳〵〳〵ども。一ツの賊布を探當ちち驚ちて鳥崎とと招ちゝ。それえのへこの枝ふ。黒の黄金とうゝ見ちれふ。斑女

の前の吾儕ふ。私ふ賜るものふこそ。これとのくふるべこのころと考らふ。山風ふちる花も。折ゝごとに又ある夏ふ。めろんさゝべ館と脱出ん。冷系の時ハ待ちとこ。花のいろねど存命ふ。ろこふせゝろくかけのひゝ。謎も財布と。つく重さ。恵ハ季札が剣ふ勝ろごいろひげどとぐろふゝ。且かゝろ且感ぐる。声さへものびくゝる。鳴崎もろとふ。紅さふ涙落。数行の涙ぐめろゝ。流ものゝ矛を泣のゝ。かくて山田三郎ハ彼財布と短冊とゝ。戴く懐ふ。ものに彼方を伏おぐ。かりせべ甲夜の間ふ母も見えく外ぐゝ。身の暇ものもべうしふ。行ふ時ハ別ふ。ゝ夜も夜ものの例ふ。鴻恩と室せん。誘ものへとのぐゝて。下括の幼鮮もめゝど。内と櫻の枝ふ投ゝけ。これふ携ゝ携ゝせゝ。築垣と超んとする。鳴崎ハ目眩ゝ。足さへさゝふ定ゝど。危くも又携ゝるふ。枝も揺ゝ霰ゝと散ゝる花ハ雪のぐ。



雲の柳ゝれる心持ゝ。辛ゝく外面へ。ゝりとて息ゝ吻めゝぐ。近江路ふ投ゝ逃去ゝめ。詰このひふるゝ行ふ斑女前ハひゝ寝もゝぐ在せふ。鳴崎終ふゝ。ゝねば。彼ふ。ゝこもゝぶふとゝて。奔ゝんとおぼしつる月日眠も去ゝぬふ。春夜ゝれば短ゝ。ゝけく。少将惟房も。四辻殿ふ退きゝく。直ふゝりのゝ。ゝば。斑女ハゝものびゝふ。山田三郎と鳴崎ゝゝを支えるふ惟房ゝ。点ゝ。ゝ。ゝも計ゝるものゝる。彼ふ。その過をゝもハれ。れも面ゝゝふ。助んとゝふ。家の法度ハ破ものゝ。已ゝふ。ゝど首を刎ゝふも至ゝべ。ゝれへ。光政が一旦の過ふゝて。その母春雨が年来の忠義を室せん。便ゝ。彼が色ふ惑ひく。君と親ゝふ遠離ハ。弱さゝ致ゝゝゝく。原来その恋の信ゝゝれゝゝゝゝめ必逐ふゝ。ぐ。宣ひゝる。春雨ハこの言ふ伝ゝく。感涙雨のぐゝおて。ゝゝ子の往方ハ

山田こうハ鳥崎と
共ゝ斑女前の恩惠
をよろこびてこうぶる
桜ふうりさる駿の
金を得く逐ひ
白川の館を
逃去

つゆぞうも念じ申せども。つゝ君の為ふい免を用ひ。こゝ恩恵ふ答ゝまつゝ
づゝ。ゝひ定めるも又哀ゝ。さてもも松井源五純則へ。群柏と相語ゝ。山田
三郎が艶筒と。主君生居のかゝうふ捨置ゝ。彼ふ罪せんと謀つゝ。ふ自分と
ゐんべ。彼二人が逢ゐんとゝ。合圖を定る。園の木陰ふ立ゐんこの夜の形容
そもゝゝぞやとそひつゝふ。斑女前春雨をもていつせのふ屏ふへ今宵も四辺
殿ふ入りゐんゝ。袴ふ退出ゐんとゐへ夜もいゝく深めぬ。弱るのせゝ倦ゝゐへば
道の程とおぼつゐるゝふ。汝今ゝゝ御迎ふまゐらゆへと仰るれば源五大ふ迷惑
ゝゝ。殿ふへ夜深ゝ院の御所を退きゐのゐまぐゝあらふ。あゝて今夜のゝ
かゝへ宜いとゝと怪ゝそひゐぐゝ。君命辞ゐふ言葉ゐくゝ。ゐゐもゐまぐ。出
ゆさめ。さて光政も鳥崎ゐえて阻めゐ人ゐゝて輙く脱出ふゐる。これ皆斑女の
恵ふゝ。源五が僻ゝふをもゝ量ゝ。彼と遠離ゐふゐんが思ふ源五ち



夜ゐけゝ後主の側ゝて館ふゐるとゐて。山田三郎を尋ふ。昨夜鳥崎と将
ゝ奔ゐると聞えゝ。驚ゐ怒ゝ。彼此ふ人を遣ゝ。その往方を探索ふ。
ゝふゐるべゝものゝざんべゝ腹ふをえゐゐゝ。ゐゐも者奴ふ果報ゐりの
ゐり。首到らるべゐ罪を犯ゝ。奔ゐとても。追捕らるゐ。ゝゝ忠義と
竭さんも益ゐり。賞罰正ゝゐれ都ふ住ゝ米ゐりゝずゐべ。ひ罵れ
とゝへども。栗津六郎をゝぐめ。ゐみとゝど顔ゝてゐりゐれば。源五ゐもゝ疑ひ
惑ひ。ゝゝ謀計を群柏が漏ゝ。君ふもその外ゐえゐゐとゐふ。忽地
影襲ゐりゝ。彼童をゝせゐへゐゐめゝと深念ゝつゐ夜竊ふ群柏と
縊死ゝ。屍を加茂川へ衝流ゝてゐる人の疑ん外怕。白川の館ふふゝる
枕の樹めゝゐべこのゐゝふ彼童が草履をゝゝゐゐて脱捨ゐゐふゝら
ゐゐゐ。さて詰朝群柏がゐえざるゐて。人ゐる普く尋めぐるふ北面ゐる枕の

木の下に脱捨る草履の外に大に驚て。こは群柏い天狗ぞとつぶやきの。
袖引くとおもへば。世に神ぐしとのみ思ふあさぶ。彼は幼くして父母を喪ひ
て。親族もなくなりのあはれ。殿も憐みのひつふ。鞍馬愛宕の峯に
拾ひ。年拾るも物ごとに奇しく。其の果てのひめ〳〵と。洛中
洛外の良賤ゆ伝へ。此白川の天狗屋舗とぞ稱る。衆人へやもの〳〵少将と
斑女のこ。伴のうとりて在せば。群柏が往方定なきめも。源五が面ふ
と疑ひおぼしてはじめ 紅葉彼と用ひのうぞ。栗津六郎のこふ委ね
のひくれば。源五いまもなく面目をうしなひく。怒りく憤おりつとつぶやく。更に色ゆも
のいさぎよ。信〳〵げに仕るぞと憎つべく侍人あり。

## 五 亀鞠俳優〳〵賊僧と歎く

こふ亦曩に叡山月林寺に登りて。沙弥とありて行雅が成長にしたがひて。
心ざまいよ〳〵正〳〵しく。師父の教誡を用ひずして行ひ放逸れば。親も疎
憎むりんざるの色。その子平家の嫡流朝敵行盛の子にあれば。そく喪るべく
首ありと。惟通に縋はれば心と菩提の道に委眼を寂滅の教にそむくべき
父母の後世一門の冤魂得脱をもとうべきに。出家人の伍行とつゆ忘れ
ぬ。酒を嗜み色に惑ひ。年十七とうの秋に。辛崎の農家。伊吹が女児と
誘ひ。往方もなくなりぬ。惟通の病死せしあれば。彼永より探索
すれども。行方知れずして。輙く脱れ課く。彼女子を携へて信濃
路に足をとどめるに。元来その性便佞なれば。彼国の住人仁科二郎平盛遠
といふ者に庇と稟。遂に盛遠が義子となりぬ。仁科平九郎盛景と名告
年鎌倉に起て。只顧奉公と望るに。ある人の吹挙にて。朝臣義時朝臣
の舎弟。北條相摸守時房の内に召れて。予ども二人を出生

とちうふ家子ぬ大九郎。女児亀鞠七才ありけるころ。盛景親子忽地鎌倉を追放せられ。その故いふと尋ふ。彼平九郎盛景年来の行ひ。ちうぶ〳〵若殿原と。大磯化粧坂の遊里ふ誘引しつべ。それがあふ賊と喪ひ色ふ溺且つ〳〵奉公等閑なるもの。殿おりうこんこうる仁科平九郎がおろかと。衆評一決せしかりく。かうるの召仕はんかう。士庶の風俗まちく乱あんとく。俄頃ふ追放せしはしうさんれど年来貪ろる賊少うれべ。駿河ある喜瀬川の郷ふ居とト て。女児亀鞠ふ歌舞俳優を做を。ゆくとうしその色をあく。世を歩くりとらんとうふ。家子ぬ大へ幼少より膽太くて。動もれば友ごうとおめ〳〵ひとちうぶ。おのれふ年の勝はるある傷りあるぐ。又常ふ父母の金銭と盗ふ。口腹のあふ用盡し。後おい他ふ借ふ〳〵返とうあるれべ。その懈ふ父母のうへふ係りて。これを償ふ少〳〵のあふめぐど。佞奸邪智ある平九郎とうう。子の悪行ふ呆果める日懲さんあふいく〳〵打懶せしかし。膽太いふく〳〵恨ふんそ。その夜ふぢうある五両めまりの金と。父平九郎が行稚とあるく。月林寺ふて祝髪せしとう。行盛の紀念あうて。惟通より相傳ある。備前の家次ぐ。自他平等即身成佛の戒刀と盗ふ。いづ地とある走ふ。ふくび帰ずこい膽太が年才十二の春あり。父しうれふ驚さうく。普〳〵その往方を索〳〵ぐ。音づれめ〳〵ざれべ。母い只顧憂ふひやうう。長き病著ふ。貯禄もおううしけあく。遺果せるひあうて。死ふの旅路ふ赴さ〳〵べ。平九郎い妻と愛子とうしなくふ。さすぶふがとくやありうん。まと〳〵亀鞠を惹〳〵。口ふの成長ふこのくふ年月のうんふ行ふびねさる初春の柳葉ふ似く。雨の恨雲の愁と含。顔ハ三月の櫻ふ異あ〳〵ど風の情月の意と藏せう。寔ふその容止の勝はるうう鎌倉いあもうも。洛みも又類

仁科平九郎盛景
喜瀬川に隠居して
母児亀鶴に教訓
習む家子悪太
友達ふ痩つけ
悪行日々
つのりて

あしとんやうぞ。こ五の秋の半ばう。白柏子こうふりのふうてゞ又と養ふ便と
ちり。いねる建久年中。この喜瀬川ふ亀鶴とゝ白柏子のあり名れどそれふハ
おほ遥ふ勝つゝく。このころいと稀なる田樂刀王などさべく俳優ともし。
鬼女怨夷ふ打扮ゝ名。い花の顔忽地ふ。ともどうぐゝ真偽と悞どうあれべ。
その名都鄙ふうれゝく。これが為ふ心蕩魂と奪ゝりの山ゝで亀鞠ハかく姿
ゝと美麗なれ。ゝざまのよゝゝねゝれ。父ふも兄ふも芳らざれべ口、痩のるふ媚ふ
献じく。実の情い為程もめゝねふ。おほ曉らぞてその弥ふ係ゝ。産と破り家と
喪ふ。不孝の子弟いと多ゝし行ふ。その親ゝるりのふく憤ゝり。所詮鎌倉ふ
ゆえめゞく。亀鞠と追ひゝるゝべ。り彼親ゝゞめゝゝゝ阻べ。絶間撃ふ
ゝゝゝゝ。この禍神と禳りあゝど。ゞゞ。ゞゞく罵りのゝゝべ。平九郎りれゞく
冷笑ひこふく世とゝゝぞ。月日ハ外ふ照ゝぬりのゝ。さべ洛へよりてこと。



運の程ともゝゝべれ。今ハ影の年と孤ゝれべ。洛の人もゝれを初雅ゝと。怨
ゝりのハめびと尋思ゝ。俄頃ふ家賊を沽却ゝく。亀鞠を轎ふ乗せ飽ぞ
廣言吐ちびつ。遂ふ武蔵川を起程ゝれべ。凡ふとりゝ人ゝて。これと敷ゝるハ
ゝりびとぞ。ゞくて亀鞠親ゝふ。その日一里ゆまりゆゝく。薩陀山のてゝゝ。倉
澤と又処ふ宿ゝりゝるふ。隣ゝる竹ゝ。弱ゝ旅僧とかゞゝきゞ二人来ゝく。假
初ふ路の疲労を問歴ゝゞ。彼僧ゞく紙門を細ゞふ開ゝ。面ゝ半ばゝ出ゝ
ゝりゝゝゝゝ。ゝまゝゝゝるふ近曾武蔵川ふ名ゝゝる。白柏子の君ふゝて。愚僧を
三嶋の神社のあゝゝ。ゞゞ寺の法師ゝるべ。日来彼郷をも初ひゝゝをり。
ゝゞゝゝの人とゝもまゝ。ゝて親ゝゞ旅ゞゝふ物結ゝゝべ。ゝれの
昊場へゝりゝゝゝと問ふ。平九郎答て。否ゝゝゝれ旅ゞゝゞゞ洛へゝゞ故郷
ゝれ。今度ゝひゝゝてよゝゝゝゝゝ。両僧ゞゝゝ。ゝゝ遥けゝ路ゝゝ。ゝゞ

出家人ふかうぞく。尾張路まぐいのうろのふ勢ふ形ふ驚くめらんうを
絶ろ獲し。洛ようづ風流うれぐいうつ世うるひもめりて。息女の名も牧高く栄え
あん。今宵ハ江口ふ宿りを求し。圓位法師が風情ありあどうち戦ヒこて
睡めくとひうけつ。紙門を舊のごくふうち立く。ものく卧房ふ入ふけれ。
平九郎も亀鞠も。合宿ハ法師ふくふろろ放し。啓行せしその日あれば
つくく疲労く熟睡ちくるふ。忽地亀鞠が叫苦一声ふ。平九郎驚き覚。
岸破と起くくくくるふ燈滅く善悪とくれば大ふ焦燥あぐ。彼此と
ん探り。亀鞠くと呼び寤せども。ちくく應あるふ。ちくく周章。郝まる
紙門ふ探らんれば人の出入る程ふてめるふろろ疑ひ。衝と入りくくく
視れば。樣づくの遺戸くく明くくのち。天ハ結陰されど。月も出ねと
おぼしくて。彼処ようふ引くのうふ。その日四隅と尋ヒば二人の僧も卧房ふ

のくぞさてハ者奴ハ念秩ゆくめうと。曉くゆくして女児を奪ハ去
んいで追うんというまくと。主人りれ安ん。燭を乗く忙しく走り来ろう。
平九郎ふくく如此くくのうめうと告もめどぞ力と取く追んとるふ。行李くへ
盗去くヒて一物も遺ぐめねばくく憤ふ堪ど。裳を裹く。直ふ庭門より走
知るふくくう脱去くうとくくく。一帯の草くの踏くたてめしぐれと葉ふ
追蒐く。薩陀山の麓ふ到ヒば折しも雲月を吐く路もくくめるふ伴の賊僧。
一人ハ亀鞠と小腕ふ抱ひ。一人ハ平九郎が行李を脊負ハ。花が似ふ彼山へ走
登くふ。吐嗟とくうめせんども。遥ふ後ヒられば。左右あくも追著得ど亀鞠を
飽まくく逞んれぐいるる時ゆも敢さくくどうん抱ヒて。髻結ふり解く。文ある
黒髪と乱し。こくくふ小指と嚼切くくその鮮血とりく満面とゆくう彩色
るふ。賊ハくくぞくて山の半ゆう。地蔵堂のかうまぐ来ふう。あの所路

仁科平九郎洛へ
上ゝんとて薩陀山
の麓倉沢とゝ
処より駆り一枝
二人の賊侍ふ
行李すと女児
亀鞠を
奪ひ
去る

挾くちく。雄まい青山峨くと聳。雌まへ蒼海渺くちく。水際ふ至て数百丈。ちるふさへ目眩くを。彼ふいわくもせど。ちふ来ちてちでめく足を倍め。抱る亀鞠を扛あろせば。こいふさも養ちあり姿る。忽地悪鬼羅刹と変じく。引も裂べき勢ひあれば。二人の賊僧驚て怕ま。脱れ走んとちる。一人岨を踏外し。撲地と倒れて滾落る。一人扶起さんとく。その手を楚と握めしが力及ばちくちろとちふ。底さへちめ海原へ美遥さまおごと陷ちる。亀鞠へちへ裸ふ謀裸く莞尓とちち笑く。裳の塵をちれ拂ひく。舊の路へ立ゆんとちるふ。ちやくと呼ちると。誰ちと見べ人も。ちしと怪しとちひあり。又走り去んとちるふ。ぼのちでわのぐくあれべさすぐふ男くちれ女ふあんども。行ちく。行ち悩る乳色ん。時ふ地蔵堂の扉と。裏ちり左右へさと開て。堂中同深ふ被



ちる荒男。禹歩ふ揺ぎ知く。亀鞠が後ちり。項髪をとり掴て汝甚膽太し。獨の二人へ欺くちも。ちでちまれを謝れ。さくべ妖の程をの。いちべとと。罵ちれし。平九郎へやちの処へ追ひ来りこの形勢を見て。少しもちちふべき。まどちる枝の枯枝めちを見く。撥取ちゆく打ち蒐れべ。彼男へ。亀鞠を突放刀とり抜く逆戟ふと。平九郎つと入りて。直ふ刃を打落せば。彼もおぼえのちものふく。ん濺りつく引組ちり。元来巌石尖ちる細路の。石淘さへ溜流ちく。つと滑ちると。上とちへと挑こ手ふ。終ふ組ぐちまと放。平九郎へ雄まの谷方へ顛ちる。荒男へ雌まちれ海へ滾落く。生死もちちどありふちり。亀鞠へ火がつと危ちつちを見く。脇脊ふ汗と流し。彼此と走り繞ちの。ちんちべちげく。されど平九郎へさんひあく。ふちくと陷ぶれべ。藤蔓ふちりつんちどつ。辛じく舊の処へ

亀鞠小指の血をとりて顔を染
鬼女のお物く賊傍ども驚し
数千丈の海原へ飛ー落も桁も
一人の荒男地蔵堂のくちよ
ありてその景迹を窺ん
平九郎も亦追蒐す

平九郎へ荒男と
引組ゝが終ゝ
左右へ
輾隨
本文ゝ

跂登りしが。こゝに来れるそれハ。彼荒男に敵せんとなすのことなく。亀鞠が異なる景迹と認めど。このところちなく其の模様を見て。大に驚き。全く妖怪しと思ひしかバ。矢庭に石を拾ひて。打かけんとする所。亀鞠睇眸て。やよ父御。わらハをなにとあるぞと叫ぶ声音の。疑べうもあらぬ女児なりければ。眼を定て熟視るに。例の俳優して。鬼女に打扮たれバ。からくと打笑てまづその故を問に。亀鞠ハ二人の賊僧を紿んために指を噛切りて顔を染たる事。彼賊どもこれに膽を冷し。脱走去んとして悞て海原へ滾落し事。又盗児たる行李刀などを賊が脊負て陥たれバ。そら復に由なき事。是彼を欺てわがこれバ平九郎ふかく愁ひて。行李の裏にハ路銀ともに入おきたるに。今是をうしなひては。浴へよるよすがもなし。さればとく。こゝより去瀬川へ立かへりなバ。世の胡慮となりなんも朽をし。とやせましかくやせましまどひて。親子さし對て



詮合するに。亀鞠地蔵堂を指して。彼男が堂の内より出きたる処ありしなり。稍ありてこゝに有る引剝する山客の魁首なるべし。されバ彼に些の物あらバ奪ハるまじきならば。窃に見まほしとゆへバ。父もげにと承引て。まづ外面よりさし覗くに。さえて人もあらざれバ。やがて堂の内に入りて見るに。只一の笈に木像の阿弥陀を安置しけると。酒の香のしたり。裡におかれ。瓢一の外に一緡の銭もなし。こハ用なき笈なり。殿の路銀を掠てのがれんと打腹たちて。其処を走り出つ。打落したる荒男が刀を拾ひとりて。月影にかざし見れバ。鐔に八の文字ありて。自他平等即身成佛と鐫著されバ。忽地駭然として驚れ。この短刀ハかの稚かりし時。卜部惟道より授りし也。六年以前想太が家出せる夜に携ゆきたるものにこそ。されバ彼荒男ハわが子想太にてありけんと。筆と硯を稚白もうせ。ちかきも其夜中なるにこゝろ遠ければ。

そんぞうもそひうけど。父がまづ〻〻千尋の底へ轆轤おとせ〻〻そ淺まうゐん。
こゝ。何とせんとて。愁傷太〻あるざれば。亀鞠も忙然と遥き海を直下
ちく〻。兄惣太が必死を哀み。悪獣もあれその類とおりの。恩愛の一條のみ。
善悪邪正の差別なく。漫ふ落涙ちくりる。且〻〻〻平九郎ハ彼笈
と扛おろ〻〻それもちぶふの形見なれば。これハ今よりこの笈を用て。回国
の行者ハ打扮。縦路ちぶ〻人ハ一銭と乞ても。洛まぐいハ至るべ〻ハ又
笠をふ〻じく。田舎女児の仮初ハ物詣ちるぐくふ見せ〻。又ハ先方後方
ハ〻ち。ろづ見ぬ〻ぬおりちして。進まぢ後見ぢ来へ。ハ阡り〻虎と
猫ものいそのの皮を剥んが為。綱〻〻亀と漁りめいその甲を取んが為。
ハ身あまりハ妍〻。且裝ひも花麗なれば。却〻ハる禍ありちろ〻しるへと
説示せば。亀鞠もいとことりふそと諾あひぬ。〻〻平九郎ハ伴の戒刀

を亀鞠ハかし〻りて。ちぶ身ハ笈を脊ハ〻〻。行者の模様ハ〻〻
ろひ。ふ〻〻び倉澤の旅宿へ〻〻ぢ。親子山路を西へ〻りて浦田川を
渉ろ〻ろ。亀鞠い河水を汐ぐ〻ひく染ろる顔の鮮血を洗ひおとし。舊の
美女とあり〻しが。この川の西ある森を。女體の森と名づけ〻〻ぢ。又惣太
が滾び墮ろる処ハ。親ちぶ〻ぢ子ちぶ〻ぢと呼ぶ〻。今ハ〻〻薩陀山中第一
の難所ぢ〻ぢ。〻〻後人口碑ハ伝ぶ〻〻。ハ〻名ぢ〻設ろるあるぢ。

墨田川梅柳新書卷之二畢

白川藩蔵書